

# 炎と氷の国

文 ウィル・ニコル

写真 サイモン・ノーフォーク

神秘的な荒野が広がる、  
ロシアのカムチャツカ半島。  
噴石を吐く活火山群、蒸気を噴き上げる  
間欠泉や雪を被る氷河がせめぎ合う  
この辺境の地は、ユーラシア最大の  
ヒグマの保護区となっている。

【前見開きページ】  
カムチャツカのクロノツキー  
自然保護区にほんやりと姿を  
現す死火山。半島には  
29座の活火山がある。  
【当見開きページ】  
間欠泉の谷から立ち上る

地熱の蒸気に見え隠れする、  
一頭のヒグマ。  
ユーラシア最大のクマは、  
体長2メートル以上、  
後ろ足で立ち上がると、  
背の高さは  
3メートルにもなる。

空がすり潰したラピスラズリのような色みを帯びる、カムチャツカの遅い午後。パイロットのアレクセイが、ベッドから起き上がり、顔を洗う。金の十字架をベストの下に押し込み、格子縞の厚手のシャツに袖を通し、ボタンを掛ける。私たちが滞在している山小屋の入口付近に、少なくとも2頭のヒグマの真新しい足跡が見つかった。私たちが魚の燻製をつまみ、ボルシチを食べた小屋のすぐそばに、ユーラシア最大のクマが出現したというのに、アレクセイは平然としている。クロノツキー自然保護区を再び探検するため、支度をしていると、ヘリコプターのローターが地面で激しく回転し始めた。世界第2位の広大な間欠泉地帯から立ち上る蒸気が、しばし谷を包み込む。壮大な舞台のなかで、温泉が噴き上げる硫黄を含んだ蒸気は、空気と反応して硫黄の華を咲かせ、地表をターメリック色に染める。

螺旋を描きながら上昇する10分間は、長く感じられる。4日前にカムチャツカに着いた時、気づかぬうちに始まっていた、1万年の自然史を遡る旅の途中に、私はいるのだ。私たちが取り囲む自然保護区の火山のなかには、噴煙と硫黄を被った黄土色の険しい崖がそびえ

る火山もあれば、青緑色にきらめく凍結した酸性の火口湖を持つものもある。火山灰が巨大な球根状の小丘に縞模様を描いている。数千年の地殻変動によって地盤が結合し、折り重なり、分裂し、融合してできた地形だ。それは今、ちょうど眼下の谷間を歩くコリヤークやイテリメンの牧夫がトナカイの毛からつまみ取るダニのように、クロノツキーの大地に薄い跡を残している。巨大な岩の裂け目に近づくと、アレクセイはヘリコプターを安定させ、地球最後のフロンティアの上空で10秒ほどホバリングを続ける。

カムチャツカ半島は、世界有数のミステリアスな旅の目的地のひとつだ。ロシア連邦領内の空港地図では、この地方の首都が小さな赤色ダイオードの点滅で示されていることがある。こんな陸地の東の果てにも、都市が確かに存在しているのですよと、教えてくれているかのようだ。ペトロバプロフスク・カムチャツキーは、カムチャツカの玄関口で、パイロットが縮尺の不均一な航空図の上にこぼした、軽食のレツドキャビアの粒のように輝いている。歴としたロシアの都市だが、首都モスクワから東に6765キロ離れ、9時間の時差がある。火山

や河川、温泉などの環境に恵まれたこの半島は、37種の哺乳類が生息している。ここは、ロシア最大のクマの生息地で、世界有数のサケ資源がそれを支えている。動物たちは、多様な局地的環境の間を比較的容易に移動することができるが、人間の移動は、ヘリコプターやオフロード車、スノーモービルや犬ぞりに頼らなければならぬ。カムチャツカには32万人以上の人が暮らしているが、極端な気候のせいでインフラの整備は遅れている。ペトロバプロフスクは、ペルーのイキトスに次いで世界で2番目に大きい、陸路がない都市なのだ。

ガイドブックには、こうした退屈な統計情報だけでなく、冒険の可能性が無限にあることも書かれているが、カムチャツカはピカレスク小説では語り尽くせない、謎めいた存在であり続けている。モスクワから9時間の大陸横断飛行中、私は、博物学者ステファン・ペトロビッチ・クラシエニンニコフが1755年に出版したカムチャツカ遠征記を読んで過ごした。彼は、デンマーク生まれの探検家ヴィトウス・ベーリングとの遠征よりもさらに13年早く、この地を踏破している。クラシエニンニコフは、「カムチャツカの短所





カムチャツカ半島には、1万4000の河川、400の氷河、150の温泉がある。コネチカット州とほぼ同じ面積を占めるこの保護区には、1万1000平方キロに及ぶ活火山と岩石層があり、入り組んだ太平洋岸に沿って、

黄土色の打撲痕のような地形をつくっている。18世紀、ロシア政府は、人里離れたこの地に囚人を送った。皮肉なことに、それがこの地域の開墾につながり、人々が定住するようになった。

が長所を上回るものであるか否か、一概には言えない」と、読者を余計に混乱させるような一節を書き記している。「その一方で、この地方は農業にも畜産にも向かない。地震、洪水、嵐に頻繁に襲われ、気休めといえど万年雪を頂いてそびえる山々をじつと眺めることくらいだ。海岸に住んでいるなら、波の砕ける音を聴きつつ、さまざまな海洋動物を観察し、彼らの知性や絶え間ない闘いについて思いをめぐらすこともできる。その点だけを考えるなら、ここは、人間よりも野生動物にとつて暮らしやすい場所といえるだろう」。

ペトロパブロフスクに降り立つと、視界はほぼゼロに近い状態だった。みぞれが降りしきり、5メートル前方につかえている車のナンバープレートさえ読めない。道路沿いに、ロシアの地方都市でよく見かける四角い建物が並んでいるが、クマや間欠泉やラッコは影も形もない。雪が雨になり、雨は雪に変わる。半島の奥地へのフライトは中止になった。ヘリポートがきつちり1時間ごとに発表する天気予報は悲観的だ。気圧のせいで旅行者は頭痛に悩まされるといふ。渋滞する市道を横目に2キロ弱ほど歩いて、私が見かけたのは、勝

手気ままに犬を散歩させる人たちと気難しそうな通勤者たちだけだ。唐突に、もうすぐ雲が暗れそうだという情報が入った。午後には、北に飛べるチャンスがありそうだった。慌てて手荷物の重量を見積もり、重い食料を放棄して、車に乗って滑走路へ向かう。修理不可能なヘリコプターと残雪の下から顔をのぞかせる可憐な黄色い花が、滑走路の境界線をなしている。アレクセイのヘリコプターは、ありえないくらい小さいように思えたが、エリゾヴォを離陸すると、低く垂れ込めた雲をローターで切り裂いて、急上昇

していく。私たちを取り囲んでいる（ここに来た時からずっとそんな気がしていた）火山は、霧の頭巾を被って、そこに立っている。頂上は完全に隠れているが、標高は3000メートルを超えている。

クロノツキー自然保護区は、ペトロパブロフスクから北東に225キロ離れたところにある。1934年に整備され、現在では世界遺産にも登録されているが、科学界から特に注目されているのが、1941年に発見された「間欠泉の谷」だ。ユーラシアでは2例目の間欠泉群で、噴出孔の数は世界で2番目に多い。そのため、クロノツキーはしばしば「炎と氷の国」と呼ばれる。ロシアの北方ステップ草原は、ほぼ夏の間中、残雪に覆われているが、

クロノツキーはすでに雪解けを迎えている。谷に近づく と、地表付近の地熱が凍結した大地を融解し、さらに凝結した水分の残りを溶かして、半島の帯水層を涵養する。私たちは、丸太小屋が立ち並ぶ一画の近くに着陸した。アレクセイのヘリコプターは、厚さ60センチの圧雪の上に、居心地よさそうに駐機している。ローターが減速し、解けた雪をブーツで踏み分けていくと、黒いアスファルトの欠片や火山灰が現れる。その輝きは、まるで、ふつくとしたシルニキというパンケーキの上に散らした野生のキイチゴのようだ。私たちは、地球上で最も火山活動が活発な場所を旅している。溶岩は、雪や岩屑を撒き散らしながら山腹を流れ下っていくという。

地元のレンジャー、セルゲイは、間欠泉の谷の管理人だ。彼は、ゲイゼルナヤ川を見渡す木造の小屋に住んでいる。クマが目撃されているので、彼は撃退用の発煙筒と自動小銃をしっかりと携えて、私たちを先導し、渓谷を進んでいく。カムチャツカでは、珍しいことではない。夏にサケの群れがやってくると、毎日のように、クマが様子を見るに姿を現す。晩春のクマは、長い冬眠から目覚めたばかりだ。セルゲイは、木道の手すりを叩いて、気の短い動物に、人間が近くにいるぞと警告する。雑木林を抜けると、一頭のクマが無防備に座って、あくびをしていた。私としては、体重635キロ以上にもなる哺乳動物を怒らせないように、もつとゆつくり歩きたいのだが、セ



ルゲイは慎重ながらも確実に歩を進めていく。初期の入植者たちは、カムチャツカのクマがシベリアのクマよりもおとなしいことを知っていた。セルゲイは、盆地を囲む火山の険しい岩壁を指さして、あと3頭のクマが近くにいと知らせる。魚を獲り、ペリーを漁った後、彼らは一斉に、山のなかの巣穴へと帰っていく。クロノツキー保護区は、ユーラシア最大のヒグマの生息地であり、ここには約800頭が生息しているが、彼らは賢く、好奇心が強いようだ。私たちが10メートルま

で接近しても、動く気配すら見せない。

最後は、セルゲイに根負けしたものの、私たちは、クマの毛もこした毛質が分かる距離まで近づいた。冬眠から覚めたばかりで、毛はボサボサだが、不思議なことに虹色に輝いている。カムチャツカのヒグマには、ペトロパブロフスクの砂浜に散乱している真珠色ながらの光沢を放つ、貝殻のようなスミレ色の斑があるという。山小屋に戻って、私はクマの足跡に気づいた。私たちが出かけている間に、ヘリコプターに引き寄せられ

て、灯油を漁りに来たらしい。灯油はクマの大好物で、毛に付いた寄生虫を素早く退治できるのだ。

アレクセイは、カムチャツカの先住民コリヤーク族の共同体の一員だ。出生名はカバブといい、これには「成長する日」という意味がある。妻のアーニャは「日の出」、彼らの言語ではウルカニューだ。学校でロシア語が義務化された際、ふたりはキリル文字で簡単に表記できる別名を選んだのだ。

雪が降るなか、ぬかるんだ道を四輪バイクで1時間ほど行くと、アレクセイとアーニャが先住民の暮らしを紹介するために営むユルトに到着する。そこで、サーモンに生のデイルと白タマネギのスライス、ピクルスを添えた料理をいただく。ふたりは、ロシアの入植者が数世紀前にカムチャツカにもたらした生活が、問題や紛争の引き金になるとは考えていない。法律は6400キロ以上離れたモスクワで起草されるが、彼らは、母語とロシア語を組み合わせ、土着の信仰や考え方を残しながら、適度に価値観を同化させている。

カムチャツカで過ごす時間が長くなるほど、この半島のパラドックスに対する当惑が増していく。晴れた日には、火山が望める。その風景はありえないほど美しい。天気が悪いと山は完全に姿を隠し、本当にそこにあるのか、確かめるすべもない。カムチャツカでは、1年のうち少なくとも9ヶ月は天気が悪い。美が身近に存在するのに、ほとんど見ることが許されないとしたら、その美は心理的な障害となるだろうか。やがて、その美を目にすることができるのか、疑問に思い始める。数ヶ月後には、その存在自体を疑い始めるようになるだろう。火山はなぜ、灼熱のマグマの欠片を対流圏に放出し、アーミン蛾の嵐にも似た、この世のものとは思えないほど美しい火山灰の雲を出現させ、数千ヘクタールの森林を跡形もなく破壊し尽くすのだろうか。

私はまだ、カムチャツカを十分に理解していないが、この神秘は、解き明かされることを望んでいないような気がする。半島の自然は、数千年に及ぶ途方もない破壊の営みによって特徴づけられてきた。地球最後のフロンティアは、永遠にそうあり続けることだろうか。

「パテックフィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。



デンマーク生まれの探検家 ヴイトゥス・ベリングによって1740年に建設されたペトロパブロフスク・カムチャツキー(右ページ)は、距離的にロシアの首都よりも札幌や、アラスカのアンカレッジに近い。大規模な漁業が地域の経済を支えている。シシャモと同じキュウリウオ科の魚「スメルト」の干物は、伝統的に入浴施設で食される(右)。アレクセイとアーニャ。ふたりのユルトにて(下)。32万人の住民は、スノーモービルや犬ぞりで移動する。



## カムチャツカのヒグマには、ペトロパブロフスクの砂浜に散乱している真珠色ながらの光沢を放つ、貝殻のようなスミレ色の斑があるという。